

共生をめざす新世紀に

学 校 長 鈴 木 盛 久

2001年、いよいよ新しい世紀の幕が開けた。

今を遡ること丁度1世紀前、1900年の大晦日、新世紀を目前にして慶応義塾大学において、ある会が開催されたという。福沢諭吉も含め、教職員学生500余名が参集して開かれた世紀送迎会という催しである。その席上、学生たちは19世紀に捨て去るべきものを選んで風刺画に描き、それらを燃やして新しい時代の到来を歓迎したそうである。廃すべき旧弊として彼らの槍玉にあがったのは、因習や身分制度といったものであり、そこには過去と訣別し、リベラルな新時代を志向しようとする強い意識が感じられる。

さて、新世紀を迎えるにあたって、20世紀に捨て去っておくものは何であったのであろうか。よく言われることは、20世紀はいわば不調和の世紀であったということである。前世紀は、世界大戦、東西紛争、南北紛争、民族紛争など数え上げれば切りのないほど多くの、そして大規模な争い事に明け暮れた時代であった。戦争や紛争に限らず、各種の差別などにみられるように、人が人によって大きな負荷を与えられ調和を欠いた時代、それが20世紀であったと思う。また、特に後半部分では、環境問題という形で顕在化したように、人が、万物の霊長という勝手な位置づけを欲しいままにした結果、自然環境に大きな負荷を与える不調和場面も増えてきた。このような、前世紀を象徴する様々な不調和を解消することが今世紀の大きな課題である。

前世紀への反省にたつとき、新世紀においてまず志向されるべきことは、何といても「共生」ということではないだろうか。あらゆる場面で、他者の存在に気づき、他者を理解し、そうして他者と共に生きることをめざしたライフスタイルへの転換が望まれよう。

本校においては、平成9年度から研究のメインテーマを「自立に向かう子どもたち」と設定し、さらに平成12年度からはサブテーマとして「人やものとのかかわり」に焦点が当てられている。益々複雑化するであろう今世紀を生きていく子どもたちには、この地球に生かされている存在としての自分を認識し、自分と他者、それが人であれ、ものであれ、それらとのかかわりに気づき、智慧を出して、うまく折り合いをつけて貰いたいという思いがそこにある。勿論、地球市民として共生をめざすには、その前提として自立しなくてはならない。自らを確立するなかで、他者とのかかわりに気づき、常に共生を意識したかかわり方をめざして欲しいものである。

共生といえば、昨秋、国際協力事業団の研修で本校を訪れたアフリカの現職教員たちのことが思い起こされる。彼らが、異口同音に悩んでいたことの一つは、日本のように発展したい、しかし自国の、そうして地球の豊かな自然を壊したくない、というジレンマであった。それぞれの国における次代の教育を担う人たちであると同時に地球市民としての彼らの思い、ここにも、共生への強い意識が感じられる。

本校の研究同人は、身近なところから、より良い共生の為の方途を探っていきたいとの視点に立って、子どもたちの自立と育ちを願い、ささやかながら努力を積み重ねているつもりである。本紀要には、そのような様々な実践をもとに議論してきた成果をおさめている。読者諸氏の忌憚りの無いご批評やご助言を頂くよう心からお願いする次第である。